

### 3. メソアメリカにおける犬の役割と表象

嘉幡茂\*1、フリエタ・ロペス\*2

#### はじめに

すべての犬は、現在より2万年から1万5000年前に東アジアに生息している中国オオカミから家畜化され、人の移動に伴って世界各地に広がったと考古資料やDNA分析の成果から理解されている（田名部 2007: 5-23）。考古学的に最も古い犬の骨は、ドイツにある遺跡から出土しており、1万4000年前の年代が与えられている（Lovata 2000）。その他、イスラエルにあるお墓からは、1万2000年から1万年前と考えられる犬の骨が出土している（Davis y Valla 1978）。一方、羊、ヤギ、豚などの草食または雑食性の家畜は、旧大陸で1万2000年から9000年前に飼育され始めたと考えられている。ここから理解できるように、犬は人類史の中で最も早く家畜化された動物であった。

アメリカ大陸では、犬の存在を示す証拠が人間と共に出土し、独立した形では出土していないため、アジアから連れてこられたと考えられている（Lawrence 1967）。この大陸ではアメリカ合衆国アイダホ州にある洞窟から1万500年前の犬の骨が出土しており、これが最も古いものである。また、これらの骨にはアジアで生息するオオカミの種と関連する特徴が見られると報告されている。

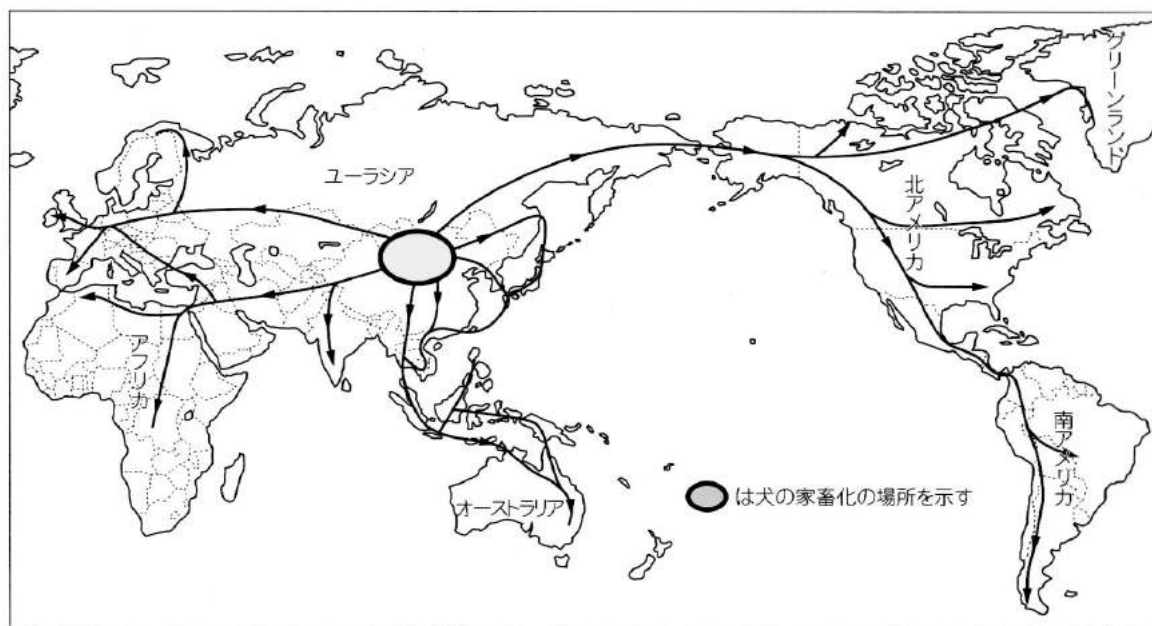


図1：犬が世界各地に広がった推定ルート（田名部 2007 より）

犬の起源は、冒頭で述べたオオカミ、その他、ジャッカルとコヨーテに求められると考えられていた。これら野生種は、犬と交配させると妊性のある仔を産むため、当初、犬の候補として検討されていた。しかし、コヨーテは北アメリカ大陸のみに生息しているため、候補から外された。ジャッカルが候補として除外された理由は、野生動物を家畜化すると、体重に対する脳重の比率が低くなることと関連している。つまり、犬の脳重比はジャッカルよりも重いため、ジャッカルが犬の祖先であったとは考えられ

\*1 メキシコ国立自治大学文学部人類学調査研究所博士後期課程修了。現在愛知県立大学客員共同研究員。専門はメソアメリカ考古学。メキシコ中央高原のテオティワカンやその周辺地域で発掘調査に従事し、中央と周辺地域の地政学的関係や古代交易システムの復元を研究テーマにしている。

\*2 メキシコ国立自治大学文学部メソアメリカ研究学科博士前期課程修了。専門はメソアメリカ人類学。考古理化学（PIXEとXRF）を基に、粘板岩、翡翠、黒曜石の産地同定分析を行い、テオティワカンにおける初期国家の形成・発展と資源獲得戦略との相関関係を研究テーマにしている。

なくなったのである。

新大陸における家畜動物に関して、古代メソアメリカ文明圏ではアメリカ大陸自生の七面鳥、オウム、インコ、ミツバチが、他方、アンデス地域ではリャマ、アルパカ、モルモット（テンジクネズミ）が挙げられる（稲村 1993; Valadez 2000）。南北アメリカ大陸における犬は、厳密には新大陸で家畜化された動物とは言えない（図 1）。それは、先の述べたように、犬の起源が東アジアに求められ、人類がベリンジアを經由し新大陸に入植した際、彼らと共に既に家畜化された犬がこの新境地に移り住んだと考えられているからである。

しかしながら、新大陸に移り住んだ犬は、人々によって品種改良が行われ、人々の生活の中で必要不可欠な家畜であり続けた。現在、犬は番犬、狩猟犬、牧畜犬、闘犬、愛玩犬など様々な用途に飼育され、およそ 400 品種が開発されている。

本論考では、古代メソアメリカ社会において、犬にどのような社会的役割が与えられていたのか、考古資料や民族資料などを基に考察する。家畜化されなかったジャガーや蛇などとは異なり、犬は直接、権威の象徴として利用されなかった。しかし、家畜化された動物として、また人間社会の中で最も身近な存在として、犬の表象を考察することは、メソアメリカの古代人が動物をどのように認識していたのかをより深く知る資料になると考える。

### メソアメリカにおける犬種と人との関わり

様々な先行研究から、メソアメリカ社会でも人と犬の関係について理解することができる（e.g., Valadez

*et al.* 1999, 2003; Valadez 2000）。先スペイン期での犬の役割は、時代と共に、また地域によっても多様であった（Manzanilla y Serrano 2003; Sahagún 1999; Valadez y Mestre 2007; Valadez *et al.* 2004, 2009; Rodríguez *et al.* 2001）。一般的には、犬は食糧源、マスコット（図 2）、生者と死者の護衛（図 3）、神話や伝説に登場する重要な動物（図 4）、儀礼での主要動物（図 5）、伝統医療の薬の一部としても用いられ、用途は多岐にわたっていた。ただ、伝統医療の薬の一部には、動物として犬のみが利用されたのではなく、その他の動物、例えばオポッサム（トラクアチュ）や針ネズミなどの肝臓、骨、尿、骨髄も使われていたため、犬のみが医療と関係するわけではない。一方、宗教儀礼における生贄、カレンダーのシンボル、神々の下僕、さらには神の化身としても登場する。これらの多様な用途は、考古資料だけでなく、クロニスタらによって記された史料からも理解できる（e.g., Durán 2006; Sahagún 1999）。一方、犬の骨は手工業製品を作成するための道具針やのみとして利用されたことが、考古資料から理解できる。

古代メソアメリカ文明圏では、8000 年前に犬を表した土偶が出土しているとの報告があるが詳しい出土状況などのデータがないため定かではない。しかしながら、イダルゴ州のテコロテ洞窟から犬が人間と共に墓から出土しており、5500 年前の年代が与えられている。この共伴関係から、古代メソアメリカ文明の形成前から、既に人間が犬に他の動物とは異なった役割を与えていたことが理解できる。核オルメカ地域で犬の骨が先古典期から発見されており、その後、メシーカ社会や植民地時代においても継続して認められている。ただし、植民地時代以降は、西洋から持ち込まれた犬種と交わったものが大多数であり、メソアメリカで品種改良された犬種の表現は減少する。

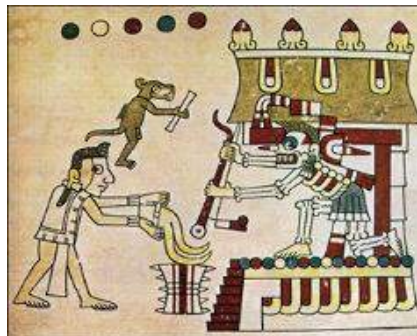


図 2 (左上) : トラティルコ遺跡出土の女性と犬の土偶

図 3 (右上) : ラティンリンシュル遺跡出土の土器に描かれる商人と犬

図 4 (左下) : ミクトランテクトリ神の前に人と登場する犬

図 5 (右下) : コリマ州から出土した人の仮面をかぶった犬の土偶

メソアメリカで人と共に生きた犬には、どのような種が存在していたのだろうか。

一般的にメキシコでは、旧大陸から連れてこられたある犬種が、何らかの遺伝的变化によって誕生した在来種のショロイツクイントレ (*Xoloiztcuintle*) を、体毛がないことから特別視する傾向がある。ショロイツクイントレの語源はナワトル語にあり、体毛がないことから派生して「しわのある犬」または「珍しい犬」という意味を持っている (Valadez y Mestre 2007:9; cfr. Sahagún 1999:960)。しかしながら、犬について長年研究を行っているバラデスらの調査によると、先スペイン期の犬種の中で、ショロイツクイントレという言葉は、「しわのある犬」のみを指すのではなく、同じ犬種の中でも体毛のあるものも認められ、ショロイツクイントレが「毛のない犬」のみを指すことは誤りであると指摘する (Valadez y Mestre 2007:29-30)。

では、現在の遺伝子学的分類では、「毛のない犬」と「毛のある犬」をショロイツクイントレとして同じ犬種の中で扱われるが、古代社会において「毛のない犬」は「毛のある犬」と比較して特別な犬種としての地位が与えられていたのだろうか。

メキシコ西部で頻出する犬の土偶の多くは、毛のないショロイツクイントレまたはトラルチチ (*Tlalchichi*: 足の短い犬) であると言われるが、科学的に証明することが困難であるため断定はできない。最も確実に同定できる方法は、犬の歯である。毛のないショロイツクイントレ犬は、牙がなく、歯は他の犬種と比較すると細長い (図6)。この特徴から、確実に毛のないショロイツクイントレ犬を描いたと考えられるのは、テオティワカンにあるティティラの壁画 (図7) のみであると指摘している (Valadez 2000)。またバラデスは、メソアメリカで出土した犬の骨のうち、毛のないショロイツクイントレ犬と同定できるものは僅かであり、多くはメソアメリカ地域でよく見られる犬の一般名称であるイツクイントリ (*Itzcuintli*) のものであると述べている。これらから、バラデスは、双子や身体的特徴に欠陥の見られる人間には、ある特別の社会的役割を与えていたメソアメリカ社会であったが、犬の体毛がないという特徴はこの社会において重要でなかったと指摘している (Valadez 2000)。また、古代メソアメリカ社会の習俗について貴重な史料を遺したサーゲン神父も、「毛のない犬」について述べているが、彼のインフォーマントが、毛がないという希少性で情報を提供したと伝えている (Sahagún 1999:85, 127, 206, 244-245 y 506-508)。現状では、犬種や身体的特徴によって、特定の犬が好んで用いられたと言える資料はないと言える。

しかしながら、メキシコ中央高原の古典期終末期に属するテオティワカン遺跡にある洞窟からは興味深い資料が報告されている。ここから 455 体の動物遺体が発見されたが、この内 20 体は人が意図して品種改良を行い、オオカミと犬の交配によってできたロベロー (*Loberro*) であると言う (Valadez y Mestre 2007; Valadez et al. 2009)。これらは、体長が一般の犬よりも大きく、最大のもので高さ 53cm、体長 71cm であった。また、アステカ王国のテンプロ・マジョールの石碑コヨルシャウキ (*Coyolxauhqui*) の下や幾つかの埋葬施設から出土したロベローはさらに大きく、体長はおよそ 100cm であった。

これを考慮すると、ある特定の儀礼では大型の犬が好んで用いられたこと、さらに、時代を経るごとに、品種改良の知識も進み、より大きな犬種をうみ出すことが可能であったことが理解できる。また、人に従順な犬が、家畜化されなかった他の動物の用途と同様に、儀礼の場でも利用されていたことは興味深い。

これを具体的に示す事例がサーゲン神父によって報告されている (Sahagún 1999:85)。犬はさまざまな儀礼の場において、食料として利用された。例えば、メシーカ人の守護神であるウイチロポチトリを祝う古

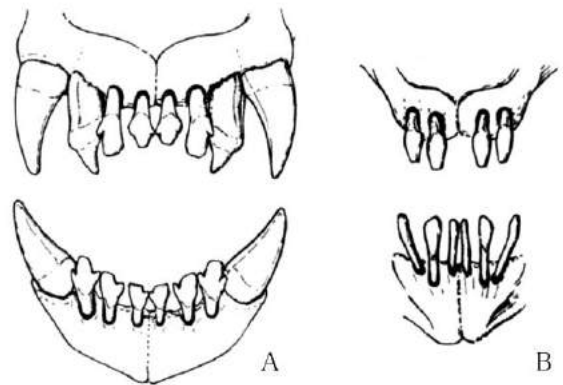


図6：一般的な犬 (A) とショロイツクイントレ犬 (B) の歯の違い (Valadez 2000 より)



図7：犬と同定できるティティラの壁画

代暦の9月に行われたトラシヨチマコの祭典 (*Tlaxochimaco*) や、ウイチロポチトリを祝うパンケツァリツウリ月 (*Panquetzaliztli*) には、ポチテカ (*Pochteca*: 商人) は祭りの際に、生贄として犬を供える。ポチテカたちは、ここで自らの富を顕示するために、犬を主要な食材にし、様々な動物や植物からできた料理を用意する。

植民地時代の史料は、メキシコ中央部において干ばつ時に、毛のないショロイツクイントレ犬が、雨乞いのために雨の神に捧げられたと伝えている。雨乞いと関連し、先に述べたテオティワカンのバリージャ洞窟から埋納された455体のイヌ科の遺体は、大地の子宮において豊穡を祈願する行為であったと解釈されている。

一方、サーグン神父は、犬はこの世と異世界ミクトラン (*Mictlan*) を繋ぐ使者としての役割があったと述べる (*Sahagún 1999:207*)。その記録によると、死者が布で包まれた後、一匹の犬が生贄にされ共に焼かれたと言う。生前に高貴な者であれ、一般階層の者であれ、死後は茶褐色の犬を一匹伴わないといけなかった。何故なら、このお供の犬は、死者がチコナワパン (*Chiconahuapan*) またはチコナウミクトラン (*Chiconauumictlan*: 死者の住む第9層の世界を取り囲む川) と呼ばれる川を渡る際の手助けとなるからである。サーグン神父は、犬の主人は犬の首に綿の縄を巻き、窒息死させる際に、「そこで私を待っている」といって優しく犬をなでるのだったと伝えている。そこはミクトランを指し、そこに到達するまでにはチコナワパンなど幾つかの川を渡らねばならず、犬の背中に乗り渡ることが可能であった (*Sahagún 1999:229*)。同様に、サーグン神父は、泥棒は捕えられると直ぐに処刑されるため前もって犬を盗みだし、首に縄を付けこの儀式をまず始めに行っていたとの逸話も残している。

一方、犬の飼育に関して、メシーカ人たちの間で、火の神シウテクトリ (*Xiuhtecutli*) が守護神であるイツクイントリの日生まれた者がこの仕事に従事するのが伝統であった。サーグン神父は、この日とナウイ・イツクイントリ (*Nahui itzcuintli*) と呼ばれる日に生まれた者が、もし犬を飼育する仕事に従事するならば、幸運と富を得ると述べている。犬を飼育する者は人生を豊かにし、犬と共に栄えると言う (*Sahagún 1999:229*)。何故なら、毛があろうがなかろうが犬を食することは当時一般的であり、家畜化動物の種類が乏しかった古代メソアメリカ社会において、飼育された犬は貴重な動物性蛋白源であり、これに従事する者は安定した収入を得られたからである。犬は定期市 (*Tianguis*: ティアングイス) で購入可能であり、ドゥラン神父は16世紀のアコルマン市の祭りでは、祝祭の食用として、また儀式用の生贄として、当時存在していたすべての犬種が売られていたと伝えている (*Durán 2006:180-184*)。これらの情報は私たちに、先スペイン期のメキシコにおいて、犬が様々な状況で利用され、そのための飼育法や調理法などの専門知識を持っていた職業が存在していたことを物語っている。

上記のように、史料や図像と考古資料から、犬が人間社会の中で様々な用途で利用されてきたことが理解できた。しかし、一方では食用とされ、他方では死者の供として人間に必要とされ、犬の利用に全く異なる二つの性格が認められる。

これは何に依るものなのだろうか。先にメソアメリカの考古資料は豊富であると述べたが、現状では形質人類学的な観点からの研究が多く、メソアメリカ社会の発展と共に、どう利用方法が変化または複雑化したのかといった文化的な解釈はなされていない。この問題を考察するために、通時的な資料がより豊富な日本の事例をまず紹介する。その後、これと比較しメソアメリカの犬の用途についての解釈を行う。

## 日本における人と犬の関係

日本では縄文時代の開始から犬が飼われていた (設楽 2008; 石毛 2009)。最古のものは紀元前8500年前の縄文早期に位置する。その後、約5000年前の縄文時代中期頃から、犬の埋葬例が多数発見されるようになる。貝塚の中でも人間のそばに葬られており、家族の一員と等しい扱いを受けていたと解釈されている。興味深いのは、この時代、人が犬を食した直接的な証拠は発見されていないことである。それは、狩猟活動が盛んであった縄文時代には、猟犬は人間にとって必要不可欠な家畜であったためだと考えられる。

弥生時代の銅鐸に、猟犬がイノシシを取り囲み、狩人が矢で仕留める図が描かれている。しかし、農耕を主とする生活様式になった弥生時代からは、犬の地位は没落する。食用動物として利用されるようになったのである。弥生時代中期に属する長野県の春の辻遺跡からは、食するために肉が剥がされた痕跡の認められる骨や、切断された犬の骨が多数発見されている (西本 2008)。

ここで興味深いのは、なぜ弥生時代における生産様式の変化から、犬は主に食用として利用されるようになったのかである。この問題を考えるには、オオカミがなぜ人と接触し、人がなぜ犬を最初に家畜化したの

かと関連しているため、まずそれについて述べる。この家畜化への仮説を田名部（2007: 5-9）が上手くまとめているため、ここではそれを紹介する。

人の祖先は栄養価の高い食べ物を素早く見つけるため、色覚を発達させてきたと考えられている。そして、昼間に採食を行うことによって、さらに良い食物の獲得と採食のために、色覚の発展は促進されていった。しかし、その代償として、夜間の視覚が退化したと考えられる。一方、オオカミは肉食目に属する肉食獣で、食物として主に、中型や小型の動物を狩猟していた。オオカミの嗅覚は人に比べ数百万倍も鋭く、聴覚は人より数百倍高い周波数の音を聞くことが可能である。また、視覚の面でもはるかに弱い光でも反応するため、夜目が利く。しかし、オオカミにとっても、夜間の大型肉食獣の襲撃は恐ろしいものだった。そのため、オオカミは自分の安全を守るため、自ら人のかなり近くに住むようになった可能性が考えられている。その結果、人によって殺された親オオカミの仔を飼って育てた可能性も高いと推測されている。オオカミは人と似て一夫一妻であり、2年から3年で成長した後も親の子育てのヘルパーとして助け合う。このような人の生活と似通っているところから、オオカミとの共生が始まったと考えられている。

しかしながら、このような人とオオカミ、そして犬の相利共生関係は、人が食物を主に狩猟・採集に依存し、犬が警護用や狩猟作業用として重要な存在であった時まで安定していた。弥生時代は水稻農耕が導入されたとはいえ、狩猟・採集に依存する割合も低くはなかったであろう。必ずしも水稻農耕の導入が、直ぐに犬の役割に劇的な変化を引き起こしたわけではない。ここにはもう一つ理由がある。水田農耕が渡来人によって大陸から伝わると、それに伴って豚と犬を食べる習慣も伝わった。これが、犬を食べることに拍車をかけたのだ。

律令体制が整備された後、人間社会の中で犬は、メソアメリカ社会に見られるような複雑な扱いを受けることになっていく。7世紀に牛や馬、犬、猿の食用が禁じられる。また、殺生を禁じる仏教の影響もあり、長い間日本人は肉食を避けるようになってきた。しかしながら、必ずしも犬の食用がなくなったわけではない。ただ、江戸時代の遺跡から犬の骨が武家の屋敷跡から埋葬されて出土する事例が増え、あるケースでは、三途の川を渡るために六文銭を伴った犬の骨まで発見されている。このように、死ねば丁寧人間と同様に埋葬される犬から、食用となった犬まで多岐であった（西本 2008）。

### 古代メソアメリカ社会における犬の二面性

このオオカミと人間の相利共生関係のモデル、そして、日本の事例から、犬の用途が①狩猟用→②狩猟用と食用→③狩猟用と食用とマスコットと社会の発展に伴って複雑化していることが理解できる。メソアメリカの事例を考慮する際、①から②への移行期に、日本での事例のように、生業の変化に注目することは重要である。

古代メソアメリカ文明圏において、文明開始（紀元前2500/2000年）前から、つまり集約農耕の導入以前から、犬が食されたとの可能性がある。ここから、メソアメリカでは犬が狩猟用にも食用にも利用されていたと推測できる。しかしながら、安定した犬の肉の供給をえるには、アステカ社会で見られるような専門的な集団の登場を待つ必要があったと考えられる。アステカ王国（後1325年～1521年）の前に栄えたテオティワカン（紀元前150年～後550/600年）では、動物性蛋白質の10%を犬に負っていたとの報告がある（Valadez 2010）。これは、犬の肉が蛋白質源として、十分に安定した食材としての地位を獲得していなかったことを示唆しているだろう。これを考慮すると、たとえ古代社会の都市部で犬が食されていたとしても、専門的な飼育を行う手段がなかった地域では犬の肉を食べることは稀であったのかもしれない。

一方、アステカ社会の犬の表象において重要なのは、犬がケツァルコアトル（*Quetzalcóatl*）の双子ショロトル（*Xólotl*）の化身であり、太陽を地下界へと運ぶ、また、死者を地下界へと導く先導者であることである（図8）。これは、古代メソアメリカ文明の形成以前から、人がオオカミ・犬との相利共生関係を築き、夜の護衛としての役割を負っていた当時の社会の記憶が、文明形成後、宗教体系の成立と共に、明確に位置付けられるようになった結果なのかもしれない。



図8：犬に扮したショロトル神  
（ボルジア絵文書より）

このように古代メソアメリカ社会でも、日本で見られるように、犬の役割は社会の成熟と共に変化し、複雑化していったことが理解できる。社会におけるこの複雑性は、①狩猟・採集から農耕への生業変化、②宗教や世界観の体系化、そして③犬の品種改良技術の発達に起因すると考える。性格の異なるこれらの3つの社会的要因が、犬が人間社会の中で原始よりまた他の動物と比較してもより密接な関係を保ってきたため、一層、犬の地位に複雑な変化を引き起こし、一見すると背反する食用と神の使いといった役割を負わせることになったのだろう。

## 参考文献

石毛 直道

2009 「食用の展開と多様性」『ヒトと動物の関係学 第2巻 家畜の文化』（林良博・森裕司・秋篠宮文仁 編集）岩波書店 14-36頁。

設楽 博己

2008 「動物観」『人と動物の日本史 1 動物の考古学』（西本豊弘 編集）吉川弘文館 10-34頁。

稲村 哲也

1993 「動物の利用と家畜化」『アメリカ大陸の自然誌 3 新大陸文明の盛衰』（赤澤威・坂口豊・富田幸光・山本紀夫 編集）岩波書店 49-91頁。

田名部 雄一

2007 『人と犬のきずな - 遺伝子からそのルーツを探る - 』裳華房。

西本 豊弘

2008 「イヌと日本人」『人と動物の日本史 1 動物の考古学』（西本豊弘 編集）吉川弘文館 180-191頁。

Davis, S., and F. Valla

1978 Evidence for Domestication of the Dog 12 000 Years Ago in the Natufian of Israel. *Nature* 276:608-610.

Durán, Diego

2006 *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de Tierra Firme*. Porrúa, México, D.F.

Lawrence, Barbara

1967 Early Domestic Dogs. *Zeitschrift für Säugetierkunde* 32(1):44-59.

Lovata, Troy

2000 *An Exploration of Archaeological Representation: People and the Domestic Dog on the Great Plains of North America*. Ph.D dissertation. University of Texas, Austin.

Manzanilla, Linda R. y C. Serrano

2003 *Prácticas Funerarias en la Ciudad de los Dioses. Los enterramientos humanos de la antigua Teotihuacán*. UNAM, México, D.F.

Rodríguez, B., R. Valadez, G. Pereyra, F. Viniegra, K. Olmos y A. Blanco

2001 Restos arqueozoológicos de perros (*Canis familiaris*) encontrados en el sitio de Guadalupe, Estado de Michoacán. *Asociación Mexicana de Médicos Veterinarios Especialistas en Pequeñas Especies* 12(6):198-207.

Sahagún, Fray Bernardino de

1999 *Historia General de las Cosas de la Nueva España*. Porrúa, México, D.F.

Valadez Azúa, Raúl

2000 La domesticación de animales. En *Historia Antigua de México. Vol. I: El México antiguo, sus áreas culturales, los orígenes y el horizonte Preclásico*, editado por Linda R. Manzanilla y Leonardo López Luján, pp. 297-334. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

2010 Una historia de perros al pie de la Pirámide del Sol. *Asociación Mexicana de Médicos Veterinarios Especialistas en Pequeñas Especies* 21(5):109-124.

Valadez, R., A. Blanco y V. Mendoza

- 2004 Reconstruyendo los primeros pasos del perro en el continente americano. *Asociación Mexicana de Médicos Veterinarios Especialistas en Pequeñas Especies* 15(6):207-217.  
Valadez, R., A. Blanco, B. Rodríguez y C. Götz
- 2009 Perros pelones del México Prehispánico. *Centro de Investigaciones Arqueobiológicas y Paleoecológica Andinas* 3(1):5-19.  
Valadez, R., A. Blanco, B. Rodríguez, F. Viniegra y K. Olmos
- 2003 La investigación etnozoológica y el estudio del cánido mesoamericano. *Asociación Mexicana de Médicos Veterinarios Especialistas en Pequeñas Especies* 14(6):186-194.  
Valadez, R., B. Paredes, and B. Rodríguez
- 1999 Entierros de perros descubiertos en la antigua ciudad de Tula, Hidalgo. *Latin American Antiquity* 10(2):180-200.  
Valadez, R. y G. Mestre
- 2007 Xoloitzcuintle del enigma al siglo XXI. UNAM, México, D.F.

### 3. El simbolismo y la interpretación de los perros en Mesoamérica

Shigeru KABATA\*<sup>1</sup>

Julieta López\*<sup>2</sup>

Según los datos arqueológicos y los resultados de análisis de DNA aplicado a restos óseos, el origen de los perros se remonta posiblemente entre 20000 a 15000 años antes del presente. Varios autores suponen que fue una domesticación de lobos que habitaban en el este de Asia y que, a través de sucesivas migraciones, pasaron con el hombre por Beringia al Nuevo continente, mucho antes de desaparecer el puente. En cambio, la domesticación de los animales cuadrúpedos como oveja, chivo, puerco, se remonta entre 12000 y 9000 años en el Viejo Mundo. Datos que confirman que los perros fueron los primeros animales domesticados por el hombre. Debido a que el origen del perro se localiza al este de Asia, en el sentido exacto, no fue domesticado en el Nuevo Mundo.

Sin embargo, los perros trasladados a este continente fueron criados por los hombres y fueron y siguen siendo, parte importante de su vida. Actualmente, los perros tienen varios papeles ya que pueden ser de guardia, de caza, como pastor, de pelea y el más común, como mascota. Pero también en el contexto de las sociedades mesoamericanas, este animal tuvo diversos roles.

En el presente trabajo, estudiaremos la importancia que le dieron los hombres a los perros en las sociedades prehispánicas, basándonos en datos arqueológicos y etnográficos. A diferencia del jaguar y la serpiente, animales no domesticados; los perros no se utilizaron directamente como un símbolo de la autoridad. Sin embargo, al realizar la comparación del simbolismo del perro con el de otros animales no domesticados, en este estudio pretendemos entender cómo los antiguos mesoamericanos reconocieron a los animales.

---

\*<sup>1</sup> Investigador visitante, Instituto de Investigaciones Simbióticas Culturales de la Universidad Prefectural de Aichi

\*<sup>2</sup>Maestra de Estudios Mesoamericanos de la Facultad de Filosofía y Letras de la Universidad Nacional Autónoma de México